

千の平小屋のまわりは雪は払われていたが、裏の沢道にはまだ熊笹をおおうようにして雪が残っていた。

五月十八日、仲条は千の平小屋を訪れ、吾平に会った。

千の平小屋は観光シーズン入りで、小矢部吾平も忙しそうだった。多くは溪流釣りの客で馴染みの者が多かった。

仲条は取材目的で千の平小屋を訪れた。釣客たちは早朝出掛けるので、昼の比較的暇になる時間を仲条は選んだ。

観光シーズンの繁忙期は一人では切り盛りできないので、吾平の妻とお手伝いの女性が二人、臨時に山小屋に寝泊まりしている。

「警察の足は少し遠のいたのに、仲条立彦はまだわたしに関心があるようだな」

吾平は苦笑いしながら仲条を迎えた。

客のいない囲炉裡のある居間で、二人は向かい合った。

春とは言えまだ空気は冷たい。

襖火（おきび）が掻き立てられた囲炉裡部屋で、暖をとりながら、仲条は吾平に、それとなく、質問を向けた。

「立山信仰に関係のあることで『變女轉男』の護符があることを小矢部さんはご存知ですか？」

「今日は別のアングルからわたしに追ってきたな。立山の山中に住んでいるんだから、その程度のこととは知っているよ。女人禁制の山はいまはその禁も解けたが、実際は黒部湖が出来、観光ルートが開けるまでは、ここの雄山の神社より上へは、女性の足は向かなかったようだ。それで『變女轉男』女を男に変じて浄土させるという浮土信仰が生まれた」

と、吾平は説明を加えた。

すでに仲条は、それらのことについて知っていたが『變女轉男』の魔符が、比呂あすかの首の切断口から発見されたとは吾平には伝えていない。

首なし死体で発見されたことは、すでに新聞発表されたことで、吾平自身も知っていたが、魔符の存在はまだ世間には明らかにされていなかった。

仲条としては、吾平が『變女轉男』の護符について特別の感情を持ち合わせているかどうか、探りを入れたのである。が、吾平は解説者の顔になり、一通り述べただけで、それ以上の反応は特に示すことはなかった。

この話題を、仲条が持ち出したことで、吾平は用心しているふうでもなく、仲条は心証は白だと自分勝手に判断した。仲条は話題を変えた。

「例の、岩垂六助さんの遺されたノートですが、紛失したノートはまだ見つかっていません。遺されたノートにざっと眼を通した感想を言わせていただくと、表

題通り雑感というか、岩垂六助さん 自身の日記というか、まあ全体に取りとめない調子のものでしたが、どうも紛失したノートにだけは何か重大な事柄が記されているようで、それで、何度もおききして申し訳ないんですが、ほんとうに小矢部さんは、ノートには眼を通してはおられないんですか？」

「前にも言ったよ。二十数年も前のことは覚えていないって」

今度は吾平は硬い表情になった。

「すみません。まるで刑事口調になって……」

と、仲条はひとまず吾平に詫びた。

「事実関係を一言わせてもらうと、ノートはいわば六助爺さんには一種の日記帳のようなものだったからね。一緒に暮らしているときに、他人の秘事をのぞくように、わたしは見なかった。六助爺さんが不幸な死に方をしたあと、はじめて、わたしは遺されたノートに眼を通した。それも自殺騒ぎのあとで、知人連中が山小屋に出入りしているさなかのことで、じっくりノートに眼を通して時間などなかった」

吾平の説明に仲条は一応納得せざるを得なかった。

知人連中とは誰と誰のことを言っているのか？ ほんとうはその線も追及したいところだったが、また刑事口調になるのがためらわれ、仲条はこの件についてはこれ以上のことを訊くのはやめた。

仲条は森中と同様に、吾平が庄川征雄殺人事件の犯人などとは思っていない。

が『千の平雑感』のノートには何か秘密が隠されている？その思いを強く持っていた。もちろん、紛失ノートにこだわってのことではあったがー。

「きみはそのノートにこだわっているようだが、何か特別のことでも書いてあったのか。わたしにはあまり記憶はないが」

この場合はむしろ、吾平のほうがノートの中味について関心を抱いているようだった。吾平は囲炉裡の火を掻き起こした。少し落ち着かぬふうに仲条には見えた。

「その話なんですが」

と前置きし、仲条は預かった三冊のノートの中から抜き書きした箇所を吾平に示し、自分は声を出し読んだ。

「この下りはどうも気になるものですから。ちよつと読ませていただきます。

神の怒りというが如何なものか。破砕帯の湧水事故によって三十四名の尊い生命が奪われた。人類史上、初めての快拳に挑む黒四ダム建設の行手に暗雲立ち籠め、山の神は黒い魔の手を、この難事業の前にかざした。」

「ちよつと待ってくれ。それは…」

と、言い、吾平は仲条を押し止どめた。何か、苦しそうな表情になった。

「黒い魔の手というのは？」

「そういう問題じゃない。わたしも黒四

ダム建設の際は工夫をつとめた一人だ。まだ、若かったが、難工事だったから、実際にこの眼で何人もの犠牲者が出る場に遭遇したこともある。聞き流すというわけにはいかんのだよ。その下りは」

吾平は静かな口調で言った。

仲条に怒りを向けたのではない。仲条はもう一点、どうしても、吾平にたずねたいことがあった。

少し問を置き、吾平の心が静まるのを待った。吾平の妻が仕事の合間を見、二人のために茶を淹れて持って来てくれた。仲条は茶を啜ることで間合いが保てた。機を見て仲条は口を切った。

「さっきの続きで申し訳ないんですが。読ませていただいでいいでしょうか」

「ああ、聞くことにしよう」

「こうなっています。さながらに神の雷鳥、雷（いかづち）と成りて、山窟を穿つ吾等に鉄槌を下せしものならん。黒い雷光の疾りたる闇に、吾れは眼のみ雷の如く光る黒い雷鳥のご神体を見たり。」

仲条は吾平の顔色を窺った。

吾平はふーと肩で息を吐くと、背を真直ぐに伸ばし、両の拳を固く握り締めて、瞼を閉じたまま、口を一文字に結んだ。

閉じた瞼の裡で、吾平は何かの影を追い求めているようでもあった。

その瞼が、ぴぐぴくと動いているのを仲条は見逃さなかった。

「黒い雷鳥がご神体とは何のことを言っ

ているのでしょうか？」

「ふむ、いま、何と言った？」

吾平は両眼を開け、仲条を真直ぐ、見返してきた。

「黒い雷鳥のご神体を見たり。そのご神体とは？」

ほんとうは仲条は『黒い雷鳥』の魔符が、すでに庄川征雄の首の切断口に残されていたことを口にしたところだった。

公表されていないことだが『黒い雷鳥』のお札が庄川征雄の首の切断口に貼りつけられていたのを、小矢部吾平は知っているのか？ それとも『黒い雷鳥』が意味するものを、小矢部吾平は知っている？

仲条が咄嗟（とっさ）に頭の中にめぐらせたことどもである。

「どうしてきみはその箇所にごだわるんだ？」

吾平はすかすような眼で仲条を見た。

「いえ、深い意味はありません。岩垂六助さんがこの箇所には赤鉛筆で傍線を入れておられたので、特別の意味があるのかと」

「雷鳥は立山では元々、神の鳥だ」

「実際に、白い雷鳥の護符は雷除けのお札としても知られているぐらいですからね。民間信仰として、こちらには定着していることですが、岩垂六助さんの一文では黒い雷鳥となっているものですから、もしかすると『黒い雷鳥』の護符もあるんじゃないかと？」

「：『黒い雷鳥』のお札？」

吾平の顔色がさっと変わったように、仲条には一瞬のことであつたが思えた。

（小矢部吾平は、庄川征雄の首なし死体と共に見つかった『黒い雷鳥』の魔符のことを知っているのか？）

が、吾平は徐ろに、湯呑茶碗を口に持つていき、一口二口、茶を啜（すす）ると、ゆっくりとした手付きで畳の上に茶碗を置いた。もう、落ち着きをとりもどした顔になっていた。

「あのノートもとんだところで、きみの想像力を掻き立てることになったな」

「いえ、それも元はと言えば、小矢部さんにこの前教えていただいた黒部人柱伝説に刺激されてのことですよ」

「だが、黒い雷鳥と、黒部人柱伝説の創作話、話としてはつながらない」

「白い雷鳥が神の使いなら、黒い雷鳥はたぶん闇夜に棲むわけですから悪魔の使いかと」

「その黒い雷鳥をきみは、黒部人柱伝説の新たな創作部分として加えたいようだな」

「昔話なども、長い年月を経て、語り部が何人もいて、話を面白くするため、自分の創作部分をつけ加えて話をしたといえますよね」

「ははあ、まいったな。きみも人が悪い。それで、その黒い雷鳥も結構だが、どんなストーリーにでき上がる？」

今度は吾平が仲条の肚の内を探る術に出た。

「……そこまでは」仲条は口ごもった。事実を元に語りかけていただけに、仲条は不意を衝かれていた。

その仲条の慌てざまをじっくり観察してから吾平は、

「黒い雷鳥というのは発想としては拔群だよ。悪魔の使いという設定もいいし、闇夜に羽毛が黒く染まるというのもわかりやすくいいな。わたしの創作話に早速取り入れて、誰かを今度はもっと楽しませてやりたい」

と言い、今度はいたずらに現（うつつ）を抜かす少年の眼になり吾平は中條を見た。

「小矢部さんならどういふふうに、黒い雷鳥を登場させますか？」

「さあ？急に言われてもな。悪魔なら善人の命を奪う、それも理不尽な方法で：人柱伝説という以上、生贄（いけにえ）が必要になるわけだから、もしかしたら、その黒い雷鳥は、人柱になる者を狩る役目を負わされているかも知れないな。そういう設定はどうだろう？」

吾平はおそろしいことばを口にした。

（黒い雷鳥は人を狩る役目？）

いかにも、まがまがしい話だったので、仲条は胸をどきどきさせた。

「それも星のない夜だ。立山で見る夜の星はいまにも地に降り落ちそうなほ

ど近く見える。きらめく星の光の下では、闇夜などという設定は成り立たないだろうな」

吾平の眼は憑かれた者の光を帯びていた。昼間のことだったが、外の陽が翳り、二人のいる居間はすーと明るさを失った。

が、吾平は仲条に静かに笑いを返したあと、明るい口調になり言った。

「警察とはちがったアングルで攻めて来るとは大したものだ。何度も刑事の来訪にあったが、アリバイとかの事実関係ばかり、ああいうのは無味乾燥な上に腹が立つ。ぜひ、今日の話の続きをまたしたいものだな。それまでに、わたしの脚色部分、ふくらませておくことにするよ」

「紛失したノートは誰の手に渡ったのか。今度の事件とは関係なくこちらにも関心大あります」

「日報さんは何か新事実でもつかんでいる？事件と紛失したノートが関係あると、きみは読んでいるようにわたしには見受けられるよ。息子から先日電話があったが、東京で宇奈月出身の女性歌手が殺されたんだって？その女性は首なし死体だったって言うじゃないか。息子は庄川征雄殺人事件と東京での首なし殺人事件はどこかでつながっているかも知れないと名探偵ぶったことを言った」

「息子さんのおっしやった根拠とは何

ですか？」

仲条は、口止めされている庄川征雄の首なし死体の事実を吾平が知っているのかと思い、問い質した。

「同郷出身者ということだけで、二つの事件を結びつけることはできません。ただ、息子は自信あり気な口吻りだった。東京本社にもどったおたくの森中記者と息子は一日会って、いろいろ話をしたようだよ」

「あ、そうでした。森中さんから一つ、小矢部さんにたずねてくれと言われていたことがあります。その東京で首なし死体で発見された女性歌手比呂あすかのことですが、本名が野々村久美、母親が野々村芳子と言いました」

仲条は野々村芳子について別の情報も得られるかと思い、吾平にたしかめた。このことも本日の取材目的の一つになっている。

「野々村芳子か。あの女の娘が比呂あすかで、殺された？」

吾平は明らかに野々村芳子のことを知っているようだった。にわかには吾平の顔つきは厳しいものになった。

「小矢部さんは野々村芳子のことをご存知なんですね」

仲条は機をのがさずたしかめにかかる。

「いや：二十年も前のことだからな。そんな名、聞いたような気もする」

とだけしか吾平は答えず、あとは黙りこくってしまった。

「その：わたしのほうで調べたことな  
んですが、野々村久美は私生児で、戸  
籍の上では小矢部さんが岩垂六助さん  
の遺されたノートをお託しになった山  
崎誠一郎氏が父親として野々村久美を  
認知しています」

「知っているよ、その程度のことは」

「山崎誠一郎さんの実子ですか？比呂  
あすかこと、野々村久美は」

「答えられないな。故人のプライバシ  
イに触れることだし」

「比呂あすか殺人事件は首なし死体で  
発見されたということ、ふつうの殺  
人事件とは様相が異なります。警察も  
たぶん、彼女の出生の秘密には関心を  
抱くことになると思います。まだ、警  
視庁のほうはその面では動いていない  
ようですが」

「宇奈月の町に流れて来て、ふっと消  
えた。それだけのことだよ。あの娘の  
母親は」

「ですが、小矢部さんは山崎誠一郎さ  
んが野々村久美を認知したことは知っ  
ておられた」

「どうしたものかと、相談を受けたか  
らね」

「当時六十代、山崎誠一郎さんは郷土  
史家で浮いた話はなかったと聞いてい  
ます。一つだけ思い当たる話としては  
、山崎誠一郎さんは室堂建設の創始者  
、長門蓮作氏と親交があったとされて  
います」

「親交と言えるかどうか。そうだな、わたしの口から言えることは、黒部ダム建設に関して長門蓮作ら工事関係者が、まじめに、山の神の噴（いきどう）りに触れることを怖れて、岩垂六助や郷土史家の山崎誠一郎に祈願の方法などについて、相談を持ち掛けていた事実があつたということだ」

「神の噴（いきどう）り？」

「そりゃあそうだろう。立山信仰の歴史は遠く天平（てんぴょう）の時代に遡（さかのぼ）ることができる。いかに、電力供給のためとは言え、神の住む秘境にダムをいきなり造ろうというんだ。こ神体である山々に懼（おそ）れを抱かぬ者がいたとしたら、これは不遜というものだ」

「……」

仲条はただ頷きを返していただけた。何か秘密を胸にしているように見えたのに、吾平は、神の噴りについて語るときには能弁になった。

「わかるかな。わたしが創作として話をした黒部の人柱伝説、それとなく噂が伝わっているのは、い言ったような長い歴史の背景を見据えてのことなんだよ」

「それでは真説人柱伝説ですか」

「まさか。それでは生々しくて、伝説になどならないよ。そういうこともあったのではないかと想像するから物語は生まれる。わたしはそう思っている

が」

吾平は眼を伏せるようにして言った。  
「このとき、宿の客が数人もどって来た。  
みんな早朝に宿を出て溪流釣りに出  
かけた連中である。」

吾平が迎えのために席を立つ。  
それ以上の長居は商売の邪魔になるの  
で仲条は引き揚げることにした。

去り際に仲条は小さな声で、吾平の耳  
に囁いた。

「ノンブル『三』のノート。永遠に紛失  
したままかも知れませんね。小矢部さん  
の記憶力だけが頼りですよ。今度伺うと  
きまでに、何とか、部分部分でも結構で  
すから、思い出しておいてもらえませ  
んか」

「きみのそのしつこさは買うよ。悪い夢  
でも見れば断片的に夢の中にでも記憶が  
甦るかも知れんな」

「悪い夢ですか？」  
「きみのその顔は白日夢を見ている？い  
や、悪い夢を期待しているほうかな？」

吾平は謎掛けでもしているふうに、仲  
条に言った。

吾平の眼は笑っていたが、仲条は気の  
せいか、吾平の眼の奥には、何か暗い炯  
(あか)りが宿しているように思えた。

「黒い雷鳥の魔符そのものは、呪符の研  
究本にも見当たらないみたいだけど、

黒い雷鳥の意味を探るのに参考になるものは、いくつかあるみたいよ」

千香子が集めてきた資料を森中の前に広げた。週末の愛の時間のために、いつものように二人は新宿西口にある高層ホテルの一室を用意した小さなテーブルの前に、二人は向かい合っていた。愛の間を持つ気分にはなく、二人は東京と富山で起きた二つの殺人事件の点と線を結ぶゲームに熱中し始めていた

「彼女の説によると」

と千香子は前置きした。

この場合の彼女とは、大学のときの同窓生で、学校に残り宗教・民俗学を研究している大学助手の伊狩冴子のことだった。

「鬼は陰の霊、神は陽の霊と中国では言い、陰陽一如（おんよういちじょ）、陰と陽の二つの気が凝結して、一つの象（かたち）がつくられていると、こういうことになるわけ」

「むずかしい学問は止めにして、パズルゲームを楽しむ気になろう」

「わかったわ。光と闇、白と黒、神と鬼神、何でも相反するものがあるのが、この世の中よね」

「男と女もそのうちの一つだ」

「まぜつかえさないで」

「パズル感覚でって言ったろ。警察のお固い頭では、連続殺人事件、接点すら見つけ出すことはできないんだから」

「それじゃ、大胆発想をするわ。伊狩助

手も楽しみながら口にしたらんだけど、白い雷鳥のお札は魔除けとして人間にご利益をもたらすのだから、黒い雷鳥はやはり鬼神の類いだろうって。でも鬼神という以上、魔の神にはちがいないけど必ずしも、人間世界に害を及ぼすだけじゃないとも言ってたわ。それから、雷鳥のことなんだけど、なぜ雷鳥なんてぶっそうな名がついたと思う？」

「ま、そのお、雷と関係があるんだろくな」

「少しは当たっているわね。雷鳥は高山に棲むせいもあるけど、その習性として日中は岩穴などに隠れていて、天候の悪いときにかえって姿を現すことが多いんだって」

「雲を呼ぶ鳥ってわけだな」

「たぶんそうね。雷雲を呼ぶってことかしら」

「雷雲イコール、雷神説か」

「そう短絡的に結びつけないで。伊弉諾子の説にも耳を傾けてあげなくちゃ。まず、雷獣についての見解、雷の本体をある種の獣と考えた中国の想像上の動物で、一般に知られるところでは狸、貉（てん）、狼、鰐狐（しゅうこ）とか、猫って説もあるのよね」

「それじゃ、雷鳥鬼神説は成り立たない」  
「ところが、雷神は天狗説ってのもあるの。天空に棲み、自由に空を飛ぶので肉の翼があつて鳥のようだったというものも中国古代の文献には見られるわ。ほら、

この羽民（いゆいみん）という名の天狗の絵を見て」

と千香子が鳥と人間と天狗を一つにしたような図を森中に示した。

「和漢三才図絵よりって文献の出所が示してあるわ。羽民国（いゆいんみんのくに）の東南の崖の淵に人にして頬長く、嘴（くちばし）は鳥にして、目赤く、首白く、全身に羽毛の生えたる天狗有り。然しながら遠くを飛ぶこと能わず、これ卵生の鳥なり。雲を呼び雷光を疾くすることから、天狗の説を得たり」

「なるほど、卵生なら鳥だよな。雷を呼ぶところは雷鳥の習性に似ていてと…もしかして、雷鳥は天狗さまの累（るい）ってことになる？」

「北京の九天宮に祭られている雷神像はワシのような嘴にコウモリに似た翼があるそうよ」

「諸説ふんぷんか」

「天狗始鳥説もさかんでいろいろあるみたい。その昔からかの所業では、人を裂き、人を攫（さら）い、木の枝に懸（か）くというのまであるようよ」

「人を攫うか？よし、話を絞り込むために、二人でこじつけ論をやろう。そうしないと『黒い雷鳥』の意味するものまさしく空をつかむような話で埒（らち）は明かないよ」

「どういうふうに？」

「まず第一点、なぜ首なし死体で、その首はどこへ行ったのか。何のために首は狩ら

れた？それと『黒い雷鳥』それに『變女轉男』の二つの魔符と殺人事件の関連性を解明しなくちゃ」

「結局、この場合、学説とか文献など関係ないということよね。遠い昔のことをほじくり出しても……」

「いや、何かのヒントにはなるかも知れない。外濠を埋めているうちに、本丸にせまる機会を得ることだってあるさ。『黒い雷鳥』に『變女轉男』この二種類の魔符はたぶん立山信仰の闇の部分に関係していることだろう。闇の世界からいまの世に向け提示されている。この事実から眼をそむけちゃ、われわれのつかんでいる折角の視点、無為に終わってしまう」

「そうね。パズルゲームとしては難題だけど」

「立山信仰についての彼女の調査レポートはどうなっている。『變女轉男』の立山信仰の中に現存するお札が比呂あすか殺人事件に登場しているのだから、われわれとしては解明の糸口をつかんではいらんだ」

「レポートを読むわ。読み終わってから、あなたのいうこじつけ論を聞くことにするわ」

と、前置きし、千香子が小論文の抜き書きの一節を紹介した。

おそらく平安時代の初期ごろから、立山信仰は、しだいに仏教的な色彩にいろどられることになる。深山幽谷にわけ入って思惟（しい）を重ね、林中を径行すること

によつて仏道を修行しようとする仏徒が入峰したからである。

俗塵（ぞくじん）をはなれた深山幽谷や、幽暗なる森林のなかにこそ、そこに止住（しじゅう）して光明を放つ仏・菩薩がある、と、仏徒たちは教えられていたから、難行 苦行の末に、雄山の頂上に立ったとき、いまこそ は阿弥陀如来の浄土に至る来迎にあい得たと感じたのであろう。

また雄山の荒寥（こうりょう）たる高地に、ものすごい噴煙と轟音をあげている噴火口をみると、ここには仏説にいうところの地獄にほかあるまいと信じるようになった。すなわち、立山には山中浄土と山中地獄とが、ともに存在すると考えられるようになる。

### 『立山信仰の歴史と文化』

高瀬重雄著より抜粋

「問題はこの立山信仰に、魔の系譜に値する習俗儀式があるかどうかだな。『變女轉男』の護符は表に出ているが『黒い雷鳥』のほうはおれには呪符ではないかと思われる。つまり、黒い儀式をともなった呪いの札さ」

「白い雷鳥は神の使い、黒い雷鳥は鬼神の使いと考えればでしょう？」

「しかし、この魔符の解釈は何度論じても堂々めぐりになる。司祭者、つまり、この場合は二つの 連続殺人事件の犯人ということになるが、現実には、司祭役を演じている者の尻尾をつかまねば問題の 核心には

せまれない」

「こじつけ論はどうしたの？」

「うーむ。なぜ首なし死体かというところがいちばんの問題さ。もしかしたら殺された二人の首は、何者かによって、神の供え物になったかも知れない」

「神とは鬼神のこと？」

黒い儀式が立山信仰の闇の世界に介在しているとする話だが」

「やはり、いま現在のわたしたちの得ている情報量では話は堂々めぐりするだけね」

「いやいや、こういう話は根気よく詰めなきゃならない。大変なことだが」

二人は顔を見合わせ、ふーと、溜息を吐いた。

「ああ、そうだわ。伊狩冴子が、岩垂六助さんが遺したノートの写しをぜひ見せてくれて。紛失した三冊目に関連した何かが残っているノートにはちりばめられている可能性だってあると彼女言ってたわ。民俗学の研究も元々、少ない資料を元に過去の一駒を何とか再現しようと試みるところは、やはり、パズルゲームに似ているんじゃないかって」

「よし、仲条にコピーを送らせよう。『千の平雑感』、案外と仲条の知識では見落としている暗号符のようなものが記されている可能性だってなきにしも あらずだ」

すでに二人は、仲条の富山での動向など

も何度か話し合ってきた。仲条は紛失したノートの行方を追い、再度、山崎昭司にも会い、また生前、山崎誠一郎が所属してい

た地元の郷土史研究会のメンバー数人とも会っていたが、誠一郎と同年輩の者には故人となった者も多く、確信の持てる情報を未だ得る段階にはなかった。

「こんなとき、靈感でもあればな。悪夢でもいいからせめて、事件を解きほぐす糸口になる神のおことばでも聞きたいものだ」最後は神頼みの心境になり森中は言った。

「今夜は女人禁制？」

と千香子が森中の深刻ぶった顔を見ながらたずねた。

「二人の儀式は明日への活力を生み出すためには必要なとき。先にシャワーでも浴びて来いよ。お互い身を清めたら、身も心もすっきりして別の発想が湧くかもな」  
「それじゃお先に」

千香子は断りを入れてから浴室に消えた。  
。シャワーの音を聞きながら、森中は煙草をくゆらせていた。

### 3

（岩垂六助とは何者だろう？ おれが富山にいたとき、小矢部吾平に聞いた話では、山に住みついた仙人のような人だったらしい。黒部湖に身を投げて死んだ？その理由については小矢部吾平は語りたがらなかった。自殺の真相は何だったのか、その線を手洗わせてみる必要もあるな）

森中は別の視点にも眼を据えていた。比呂あすか殺人事件の捜査は難行していた。弱小プロダクション所属だった比呂あす

かは、興業界では陰然たる力を誇る大手のプロダクションに移行後に人気が出たのだが、移籍時のトラブル解消金が、元のプロダクションには全額支払われていず、裁判で係争中であった。

せっかくの金の卵を、引き抜き側のプロダクションが殺すはずもなく、また引き抜かれた側の小プロダクションも恨みはあるとはいえ、裁判で結着をつけようとしていたことから、このトラブルと殺人事件を結びつけるには少し無理があった。

殺人現場と特定されたヒルズマンションの比呂あすかの自室からは、不審者の指紋は検出されておらず、この点でも犯人の割り出しは決め手を欠いていた。

現段階では犯行前日の夜、目撃されたと思われる暴力団員風の男二人が唯一の有力な手掛かりであった。

警察は、比呂あすかの悲鳴を当日の夜、誰も耳にしていないことから、合鍵を使って比呂あすかの帰宅前に何者かが待伏せし、殺害行為に出たものと推定していた。

内部の事情に詳しい者と判断、プロダクション同士のトラブルに関係している者、また、比呂あすかの女マネージャー島野美津江も同じヒルズマンションの別室住まいであることから、事件当日の行動を中心に、かなり執拗な警察の取り調べにあった。

合鍵を使って事前に部屋に侵入、待伏せして比呂あすかを殺したという推断に立てば、当然、合鍵入手可能な者ということ

になるので、女マネージャーは犯行に關与している可能性ありとみられ、警察の追及はきびしかったのである。

五月二十一日。

富山支局の仲条立彦が上京、東京本社の森中弘光と直接、取材の詰めを行うために会うことになった。日報新聞の独身寮のある東京・恵比寿の宿泊施設に仲条は午後没有时间、顔を出した。

比呂あすかが住んでいたヒルズマンションとはJRの線路をはさんで反対側の位置になるが、徒歩なら十七、八分離れているだけの至近距離にある寮だった。

入社時、社員研修にこの寮は使われもするので、仲条には思い出のある場所でもあった。

「おっ、元気か。注文しておいた珍味は持って来てくれたか」

あとからやって来た森中は、仲条の顔を見るなり遠慮のないことを言った。

「鮎うるか、香魚（こうぎよ）の塩辛、持参しましたが、地酒もと思ったんですが、そちらは重いので止めました」

「いいさ。旨い物は独りでやるよ。これ一杯飲むの、団体様では香魚の名をたてまつられた鮎に申し訳ない。最高の気分ときに、ひとりで味わわせてもらうさ」

森中は押し頂くようにし、瓶詰めの塩辛を受け取った。

「あと一時間もすれば、女二人がやって来る。それまでに、おれたちの頭のほうを整理しておこうや」

二人は畳部屋で、座卓を前に向かい合っ  
た。

「森中さんは、東京と富山で起きた二つの  
事件、やはり、どこかに接点があると考え  
ていますか」

「と言う仲条立彦も、つながりありと見て  
の上京だろう。他社が富山と東京の事件を  
結びつけて取材していないこと、警視庁と  
富山県警の連絡は密ではないことから言  
って、わが社は先行している。首なし殺人  
事件、われわれ二人で、首級（しるし）を  
挙げなくちゃな」

「首級ですか。それにしても、殺された二  
人の首はどこへ行ったんでしようかね」「  
それがわかれば、事件は解決、われわれは  
特ダネをものにしたってことになる」

二人は顔を見合わせ笑った。

「ぼくのほうから庄川征雄殺人事件の整  
理をさせてもらいましたようか」

「そうだな。事件が起きたのはそちらが  
先だ」

森中が応じたので、仲条は取材ノート  
を取り出し説明を始めた。

「庄川征雄の死体が発見されたのが、五  
月五日、午前八時二十七分、発見したの  
は金沢から来ていた女子大生二人で、こ  
の二人は事件には関係なしと断定され  
ています。また室堂山荘の関係者は主人  
の樋口市郎など六名が取り調べの対象者  
とされましたが、特に、事件と関連づけ  
るべき事柄は出ていないようです。千の  
平小屋の小矢部吾平さんですが、状況証

拠だけで新事実は出て来ず、一応、富山県警はマークはしているようですが、これ以上の取り調べは無理な状態です。関電の冬期歩道を四月十日に、庄川征雄と同道した二名の関電職員も共にアリバイが成立することから、取り調べの対象から外されています」

「小矢部さんだけだな。未だ警察に関心を持たれているのは。その点、赤根の刑事（でか）さんはどう言っている？」

「赤根刑事は、小矢部さんが犯人（ほし）だとは頭から思っていないようですよ。もつとも疑わしい人物からおれは外す主義だと」

「例によってへそ曲がり刑事どのご意見が出たな」

森中は長年付き合ったことのある赤根刑事の捜査癖に、一家言見つけたつもりで言った。

「赤根刑事は、お前たちが頼りだと…それで『黒い雷鳥』の意味するものを、われわれが解明するのを首を長くして待っています」

「その話は、専門家がここに来てから詰めることにしよう。『千の平雑感』のノートのコピー、伊狩冴子女史が、解読を試みてくれることをおれは期待しているんだ」

森中は言い、このあと、比呂あすか殺人事件の現在の捜査状況を仲条に説明した。

「どちらの事件もミクロな視点で捉える

と、隘路（あいろ）に入ってしまったうんじやないですか？」

と仲条が言い、

「マクロの視野に立てば、あまりに焦点がぼやけすぎて的が絞り切れない」

と森中がその逆の視点のむずかしさに言及した。

「その上、首なし殺人などと、事件は怪奇がかっていますからね」

「そうさ。四次元的視野も持てってことかな。しかし、世にも不思議な物語は、あれはフィクションの世界のことで、客観的に事実を報道する義務を負う新聞記者が、首を突っ込むことじゃないからな。まして、警察では魔の札の呪力など論外、赤根の刑事さん、われわれと同じ視点を持ったりすると、爪はじきされちゃうよ」

「やっぱり、何か、黒い儀式が？」

と仲条が言った。

何度かの長距離電話をとおして、仲条はすでに森中に、魔符が意味するものに、黒い儀式が絡んでいるのではないかということを吹き込まれていた。

「その話をいまから詰める。富山からやって来ただけの成果が得られればな」

森中が腕時計を見た。部屋に備え付けの電話のベルが鳴り、来訪者の名が告げられた。

女子大の助手で、宗教・民俗学研究者である伊狩冴子が、宮坂千香子に連れられてやって来た。

小矢部岳男も女二人の背に従っていた。地味な研究者タイプの女性かと思っていた森中と仲条だが、伊狩冴子は眼の凜とした美人だった。

千香子が現代的な活動家タイプの女性だとしたら、冴子は知的な美しさを湛（たた）えた女性ということになる。

「ね、冴子さんて美人でしょ。面長でストリートヘア、頭もいいし、うちの学校では光った存在だったのよ」

「いいわよ、そんな話。わたしは今夜は、魔物の世界の話をしに来たんだから」

「しれっとしてそういうところ、どう、みなさんコワイと思わない？」

「だが、怖がってばかりもいられない。連続殺人事件の謎を解こうっていうんだから、われわれは」

森中が応じ、男二人と女二人は、あらためて顔を付き合わせた。

「ノート三冊分、眼をとおすのたいへんだったでしょう。何か役に立つようなことはありましたか？」

早速、仲条は気忙しげに問うた。

「時間不足で不明のところもありますが、結構、興味深い個所もありました」

冴子はテーブルの上に、資料を取り出しながら言った。

「冴子は今度はいろいろな意味で、ずいぶんと得るところが多かったって」

「そうなんです。山岳信仰の源は、神代の昔にまで遡るので、それだけ資料もたくさんあるんです。もともと、祀っている神の名から類推すると、立山の雄山神社でもそうですが、イザナギノミコトとタヂカラヲノミコト、元は神の山であって、神仏混淆の信仰は、仏教伝来の歴史から言って平安時代の初期頃からと思われまます。つまり『黒い雷鳥』の魔符についてですが、神の領（うしは）く、神体山は自然神でご来迎の荘厳さとか、雪を頂く険しい山々の神秘さとかが、人々の心に投影した極く素朴な信仰であって、わたしの考える限り『黒い雷鳥』という呪術的な色合いの濃い魔符は仏教伝来以降の時代に発生したものと思われまます。ノノンブル『二』のノートには、『立山信仰密儀軌』という出典を示す書物の名も出て来ますし、魔符の意味を説明するには、山岳仏教の根幹をなしている密教について知る必要があるでしょうね」

冴子は序論を述べたようだったが、森中は話が学問的になるのを避けるために、例によって、こじつけ論で冴子に対した。

「密教の世界に迷い込むと、まず、出口はないんじゃないですか？あなたの理論体系をはなから、崩して申し訳ないんですが、その『立山信仰密儀軌』ですが、たしかにノートには記されていますが、実際にはその存在は確認されてはいないんでしょ」

森中が指摘したとおり、冴子からの中間報告では該当する古文書のようなものは見つかっていない。

儀軌とは、密教で仏・菩薩・諸神を念誦（ねんじゆ）する儀式軌則、または経典のことをいう。

「正直言つて、わたしにも何もわかっていませんよ。殺人事件の刑事役にはわたしは不向きですもの。でも、何かヒントになるものがあるかも知れない」と思つて

「そうよ。冴子は森中さんが考えるほど、頭は固くないの。今夜は殺人パズルゲームを解く気で来てもらったんだから」

「それに何か秘密が隠されていそうで、わたし、少しは胸をわくわくさせているのよ」

「それごらん下さい。新聞記者って職業、すぐに結論を出したがるのよ。ほんとに悪い癖だわ。それ」

千香子が冴子に代わり、男性陣に対した。

「ぼくは、今夜は『二』のノートに記されていた蛟龍（みづち）のことが知りたくて、富山からやって来たようなものなんです」

仲条が冴子の気を引き立たせた。

岩垂六助自身が、蛟龍とは、蛇と雷鳥から生まれた龍神だと『二』のノートの中で記している。

それこそ、こじつけ論というべきものだったが、仲条は赤鉛筆の引かれた一文のこ

とを思い出し、 冴子に問うた。

「蛟龍は、元々は蛇ということになるよね。でも、鹿児島では河童のことをミヅチ、また石川県能登や、滋賀近江地方ではミヅシ、新潟刈羽郡では水神（みずしん）、奄美大島徳之島ではミズシカミなどとも呼ぶ習があつたみたい。蛟龍はいずれにしろ、水の神であることにはまちがいないわ」「うむ？水の神？」

すぐに反応を示したのは森中だった。

「先輩、一体何を考えているんですか？まさか 例の話と結びつけてのことじゃないでしょうね」

「いや、待て待てえ。おれのこじつけ論、もしかしたら仲条立彦の頭の中にあるものと同じかも知れない」

森中と仲条は顔を見合わせた。

「何よ。例の話って？」

怪訝な面持ちになり、千香子が、二人の顔を見くらべながら言った。

「荒唐無稽（こうとうむけい）の話をするか。お前はと思う？」

森中が仲条にお伺いを立てた。

「せっかく伊狩さんに来ていただいたのに、話を混乱させるばかりじゃないですか」と仲条がひとまずストップを掛けた。

黒部人柱伝説―小矢部吾平が流布したもつともらしい四つの鬼火の話が真実だとすると、黒部湖の底には四人？の人柱が埋められていることになる？

森中と仲条は二人とも、何となく、小矢部吾平の創作話？にのせられて来たような

ところがあった。

水神であるミヅチと、黒い雷鳥の魔符：何か眼には見えなかったものの符牒が合い、人柱伝説が二人にはことさらに、真実話に思えて来たのだった。

みんなの話に口をはさまなかったが、岳男も実は黒部人柱伝説のことを、このとき頭の中に描いていた一人だった。

「やっぱり、今夜のところは止めておこう。『黒い雷鳥』と『變女轉男』の二種類の魔符について、伊狩冴子さんから、学説でもいいから承っておきたい。な、仲条」  
「ねえ、冴子、男たちは、何かを隠していて、わたしたちには教えないつもりのようによ」

「そんなんじゃない。少しこじつけが過ぎるなと反省したんだ」

森中が殊勝なことを言った。

千香子は納得せず、

「仲条さんも同じ意見？」

とたたみかけてきた。

「そうですね。いま話をする、闇の世界はもっと深くなるのかも知れませんが。次回はずお話しすることにして、今夜は先輩の意見に従うのが」

仲条も一応、殊勝なもの言いをした。

結局、男二人は、「黒部人柱伝説」の話は止めにした。

実説人柱伝説？そこにまで話をつなげるだけの裏付けの資料もなく、ことはそのように発展しているでもなかった。

千の平小屋の闇に囲まれた静けさの中

で聞いてこそ、黒部人柱伝説も真実味を帯びて来るというものだった。

「仲条さんから送っていただいたノートの中に、わたしなりに興味を持った点の一つあるんです。みなさんの考えを混乱させてしまうかも知れませんが、話をしたいでしょうか？」

冴子があらたまり、みんなの顔を見まわした。

「どうぞ。われわれの盲点を衝く可能性だってあるんですから」

とみんなを代表し、森中が応じた。

「連続殺人事件のことについて何にも言えませんが、岩垂六助さんの遺されたノートは、その大部分が、黒部湖が完成するまでのことに費やされていて、どこか岩垂さん自身が、開発をすすめる人間たちに対して怒りを向けている態度がありあり。もっと言えば、神に成り代わつてという姿勢も見えるわ。わたしも紛失した『三』のノートに、関心を持っている一人で、千香子さんからも話は聞いています。黒部ダム建設の遭難者と『三』のノートはやはり関係があると思うの」

「それで森中さんが期待したアングルとは？」

と千香子が、冴子にさらに意見を求めた。

「よくはわからないけど、水の神の話も出て来ることから、もしかしたら……」

そこで冴子はことばを切った。

「もしかしたら何よ？」

「水の神には、いつの時代も犠牲者が必要なのよ。つまり、生贄（いけにえ）の話になるんだけど」

「生贄か：うん、その線もある」

そう答えたのは森中だった。

森中と仲条、それに岳男の三人は「人柱？」と咄嗟（とっさ）に自問自答してもいた。

「冴子が言うのは、百七十一名の犠牲者を出したという黒部ダム建設の、その犠牲者のこと？」

「そう具体的に訊かれると、わたし、返答には困るんだけど」

女二人のやり取りに、岳男がやっと割って入った。

「ぼくは冴子さんの話がよくわかりません。黒部湖畔で育ったぼくは、親爺に聞かされていたせいもあります。黒部ダム建設の犠牲者のことを、夜の湖を見てみると、ふと、思い出すことがあります」

岳男は自分の見る〈悪夢〉のことを、形を変えてみんなに伝えた。

「ひらめきパズルだから結論なんてないが、何か、この世離れた黒い儀式が、どこかに介在していてそんな気がする。過去のことか、現在にか、いや、その過去と現在は一つにつながっていて、いま、連続殺人事件として、またぞろ、現代に甦ろうとしているのか」

森中がみんなの顔を見まわし言った。

「この現代に過去の話が甦ろうとしてい

るなら、われわれはその謎を解くチャンスを与えられていることになりました」

と仲条が緊張した面持ちで告げた。

男三人、女二人の謎解きチームの面々はお互い、頷き合った。

5

六月二日。東京・目黒署内に設けられた比呂あすか殺人事件本部が、統正会系暴力団の組員一名を別件逮捕した情報を森中記者は入手した。

比呂あすかが首なし死体で発見された事件当日から約三週間が経過していた。

恵比寿のヒルズマンションで、暴力団員風の男が二名、目撃されていたことから、比呂あすか所属プロダクションの興業に関係するその暴力団の周辺を洗っていたところ、暴力事犯で逮捕取り調べ中だった他の組の組員が、自分の罪を軽くしてもらうために、一部、比呂あすか殺人事件の情報をもらったのだった。

人気上昇中のアイドル歌手の無惨な死、犯行に加わった者が誰かに興味本位でもらし、その話が伝わり伝わって、チンピラの男の耳にも入ったのだ。

だが、噂にしかすぎない話に警察としては飛びつくわけにはいかず、恐喝の別件で逮捕、じっくり吐かせる作戦をとった。

森中は、事件当日『マンデイズ』のカメラマンが撮った車のナンバーの写真の

中に、統正会系の不動産会社、松並不動産所有のベンツが含まれていたので、単に別件逮捕とは考えず、取り調べの結果に注目した。

目黒署の捜査班は『マンデイズ』の編集部に再度、事件当日、現場に居合わせたことがはっきりしている特派カメラマンからの事情聴取を求めている。

しかし、『マンデイズ』編集部は最初の方針どおり取り調べに協力することを拒否していたので、警察の取り調べは進展を見せていなかった。だが、警察もさるもの、六月三日には、芸能部記者の宮坂千香子に取材協力という名目で接触を図ってきた。

日報新聞系の週刊誌に、比呂あすか殺人事件のスクープ記事を彼女は署名入りで発表した。記事は事件発生四日後に発表したものだったが今頃になって警察は関心を示してきたのだ。

森中は千香子から、発表した週刊誌の編集部を經由して取材協力を求めてきた警察の出方についてどう応ずるべきか、事前に相談を受けた。

千香子が発表した記事は、仮定だがという断り書きを入れてから、かなり詳しく、事件発生当夜の比呂あすかの帰宅の状況、そして、首なし死体発見時の早朝の様子を伝えていた。

実際に現場にいなければ：わかり得ない事柄も何点か指摘されており、警察側は記事が発表された当初から、宮坂千香子には関心を抱いていたようだった。

森中は、署名記事には、自らが責任を持つべきだというポリシーの持ち主だったから、千香子が警察の捜査班の連中と接触することを許した。

記者の立場から言えば、他社は宮坂千香子が警察に協力を求められたことは知らないはずだし、また、虎穴に入らずんば虎児を得ず譬（たと）えどおり、警察側の取り調べが、比呂あすか殺人事件について、どの程度すすんでいるかを知る手掛かりになるとも考えた。

もちろん、森中は千香子にこの考え方の主旨は伝えた。

千香子も納得し、六月四日に目黒署の刑事と都内のホテルの一室で会った。

被疑者ではなく、相手が若い女性ということもあって、一応、警察側は配慮したふうがあった。

約二時間の接触で、目黒署の刑事二人は、いくつかのポイントについて、千香子から裏付けをとったようだった。

森中と千香子は、その警察の事情聴取に千香子が応じたあと、場所を他に移し、二人きりで会った。

いつも会う新宿西口の高層ホテルのコーヒールウンジが二人の指定の場所だった。森中が先に来て待っていると千香子がやって来た。

「まるで取り調べよね。人権を侵されているって気もしたけど、わたしのほうも収穫はあったわ」

千香子は坐るなり言い、アイスコーヒー

を注文した。

もう外は初夏の陽射しが強く、外からや  
つて来た者には、すぐにはホットコーヒー  
は口にしたくない気候だった。

「さあて、今度はおれのほうが鬼刑事にな  
る。追及の手は休めないからな」

森中は取材ノートを取り出し、すでに、  
身構えた。

「アイスコーヒーを飲んでからよ。息つく  
間もないんじゃない、それこそ人権蹂躪という  
ものよ」

千香子はハンカチを取り出し、鼻頭に浮  
いた汗をそっと押えた。

「富山のほうは、事件発生後、一カ月近く  
経つのに、まだ、犯人像は絞り込まれてい  
ないようだよ。仲条の話だと、庄川征雄が  
姿を消した四月十三日以降、死体が発見  
された五月五日までの立山黒部アルペン  
ルートの登山者、入山者リストの作成は  
完了し、不審者を洗っているところだそう  
だが、実際はお手上げの状態らしい。ゴー  
ルデンウィークがネックになっている」  
「それでなくとも秘境の山の中じゃね」  
「いや、都会だって同じことさ。他人のこ  
とには無関心の人間が多いわけだから、人  
の眼はないに等しいんじゃないか」

森中が話をしているときに、アイスコー  
ヒーがテーブルに運ばれ、やっと、千香子  
はのどを潤した。

「警視庁は富山の事件には何の関心もない  
みたいよ。時間をわたしのほうから限った  
せいもあるけど、東京の事件だけに質問は

集中したみたい」

「第一点は何だ」

「わたしの書いた記事で、午前二時すぎに比呂あすかが車で帰宅したって下り。警察はわたしが記事を書き週刊誌に渡した五月十二日午後八時の段階では、警察はそのことは公表していないって。マネージャーの島野美津江の供述で、事件当夜の行動を追い、ウラを取ってまちがいないと警察側が判断したのが丁度、わたしが原稿を渡した日の夜、つまり、事件発生の翌日の夜だったってわけ」

「緊急差し変えの事件レポート、四日後発売の週刊誌じゃ、下版のプロセスで、そこだけ変更ってわけにはいかないしな」

「ま、いい線、ついてきたんだ。それで、わたし、比呂あすかのスキャンダルネタを追っていた事実だけは認めたの」

「第二点は？」

「わたし、首なし殺人事件のこと、全体にまがまがしい感じでまとめたでしょう。富山の事件では、黒い雷鳥、それに、比呂あすかの首には『變女轉男』のお札が：わたしが記事を書く段階ですでに、問題の比呂あすかの死体遺棄現場の写真は眼にしていたわけだから、当然、記事を書く側としては、そのような視点になるわよね」

「しかし、あの記事はその点に関してはかなり抽象表現になっている」

と森中は言い、千香子が発表した週刊誌の記事のコピーを取り出し、再度、眼

をとおした。

千香子が指摘した問題の箇所は次のような記述になっている。

比呂あすかの遺体に首はなく、何者かに持ち去られたということは、猟奇事件の様相をこえ、黒い儀式の供げ物に彼女の首が供せられたのではとの思いさえ抱く。怨恨説をとるとしても、首を持ち去ることを動機づけることはむづかしい。何の目的があって比呂あすかの首は切断後、殺人現場から持ち去られたのか？

扼殺の事実を隠すため？

が、過去の犯罪にそのような例はない。それにいちばん問題なのは、確実に人の眼につくマンシヨンの地下駐車場に、首なし死体が遺棄されていたという事実注目する必要がある。

通常の殺人事件では、死体は秘匿（ひとく）されることが多いし、事件発覚を遅らせる何らかの手段が講じられていることが多い。

比呂あすかを殺害し、首を切断したこの事実を白日のもとにさらすことの目的は何であろうか？

挑戦的犯罪？または、何人（なんびと）にも想像し得ないような現代の黒い儀式が、比呂あすか殺人事件の裏には隠されているのだろうか？

「それで警察は、黒い儀式とは何のことか？そのように類推した根拠を示せとこうなの」

「なるほど。それで何と答えた」

「答えようがないわ。そりゃあ、『變女轉男』の魔符についてしゃべりたかったけど、そればかりはね。それでイギリスの探偵作家の『悪魔の城砦』という小説に出て来たタロットカードの組み合わせが仕掛けの物語、首なし連続殺人事件だったものだから、つい、そのことを口にしちゃった」

「それとなく、首なし殺人事件と魔符の存在を匂わせておいたわけだ。宮坂千香子も容疑者の一人になる資格ありだ」

「それと、比呂あすかのスキャンダル種を追っていたということ、例の『マンデイズ』のカメラマンと同行取材チームを組んでいたのかと、しつこく訊かれたわ」

「ますます怪しい」

「写真誌に発表された死体遺棄現場の写真は見たか？それから、あの写真を見て、何か変わったことがあったかと感想もわたし求められたわ」

「もちろん、宮坂千香子は魔の札の存在には気がついていないふりをした」

「発表された写真は少し焦点がボカしてあるから、余程、気を付けないと異物を見つけてるのはむづかしいわ。わたし、なぜ、そんなことをたずねるのですかと、逆に質問しちゃったア」

「相手は眼を白黒か」

「そうでもないの。日本版『悪魔の城砦』って話、ないわけではありませんからねと、向こうさんも辻 棲を合わせてきたんだ

ア。ほんとうは、あのひとたち 『變女轉男』の魔符の意味をわたしに教えて欲しかったんじゃない」

「ま、おれたちでも調べがついたんだから、あのお札の出所ぐらいはもう調べ上げていると思うがな」

森中は二杯目のコーヒーを注文した。

千香子も お代わりをする気になり、室温が快適だったので、今度はホットコーヒーをボーイに頼んだ。

「それで、二つの事件、これからどのような展開を見せるのかしらね」

千香子は情報を提供した立場から、今後の事件の推移について森中に質した。

「統正会系の暴力団員、噂話だけの別件逮捕、何も出て来やしないさ。こちらには例の車のナンバーを撮った写真はあるが、あの写真、警察に提供したところで、直接の証拠物件にはならない。日時の特定だって出来るわけじゃなし」

「だから二つの事件はどうなるわけ？」

「さあ？連続殺人事件だしたら敵はまた別の動きを示すかも知れない。富山も東京の事件も、首なし殺人、死体遺棄、魔符の存在と共通点がある。そして魔符は立山信仰に関係あり。これはおれの勘だが、次の殺人事件が起きそうな気がする。そのときに、犯人側、つまり黒い司祭者がわれわれの前にちらとでも姿を現してくれるんじゃないだろうか。方角はいずれにしろ、北の方角、富山という気がしているんだがな」

「ずいぶんと自信があるのね」

「この前、仲条と電話で情報交換したとき、二人の意見が合ったんだ。殺しの対象者は四人じゃないかとね」

「なぜ四人なの？」

「この前、伊狩冴子、小矢部岳男、それに仲条も入れて五人で話をしたときに、おれと仲条が言い淀んだことがあったろう。そのことと関係ありさ」

「何だったの、あれ？」

「まあ待ってくれ。おれたちが話が出る自信がつくまではまだ時間がかかる」

森中はまた千香子の質問を遮った。

（黒部人柱伝説？おれも仲条も小矢部吾平の創作話に惑わされている？いまはまだ、何の真実話も手には入れていないのに）  
何回も頭の中をめぐった考えを、このときも森中は追っていた。

この考えを強く支持しているのは、仲条のほうだった。紛失したままのノンブル『三』のノートの方方を追い、またその内容を少しでも知ろうとして、あれから何回か仲条は黒部湖畔の千の平小屋を訪ね、小矢部吾平に会っていた。

昨夜、杜のほうに電話が入り、仲条は比呂あすか（野々村久美）の母親、野々村芳子の行方を突きとめたと連絡して来た。

野々村芳子は、長野県大町市に住んでおり、いまは新興宗教、真光命教の女教祖に身を変えていた。

上市署の刑事、赤根が警察のルートを

使い野々村芳子を追跡、その所在を突き止めたのだった。

「明日は、ぼくは黒部ダム越えをし、大町に行つて来ますよ」

と仲条は勇躍、森中に告げた。

新興宗教の女教祖に身を変えた野々村芳子の半生に何があったのか、彼女は何らかの秘密を胸に抱いているのか、仲条共々、森中も宇奈月の街から不意に消えた女、野々村芳子に多大の関心を寄せていた。

コーヒーを味わうように飲んでいる千香子に森中はこの朗報？を教えてやった。比呂あすかの出生の秘密、そのことには、千香子も関心を寄せている一人のはずだった。

6

長野県大町市は、開けた市街地に、自然の景観の美しさも充分に残した恵まれた地であった。

山岳都市などと呼ばれており、北アルプスの山々を朝な夕なに眺めることのできるこの町は、黒部立山に入るアルペンルート of 玄関口とも呼ばれている。

高原の地らしく、六月の季節、吹く風も爽やかだった。

日報新聞記者、仲条立彦は、六月に入ったばかりの日、大町市取材のために訪れた。いつも富山側からばかり北アルプスの山々を眺めている仲条には、長野

側からの山々の列なりに別の感慨を持った。

蓮華岳（れんげだけ）、赤沢岳、鳴沢岳、岩小屋沢岳、爺ガ岳、鹿島槍ヶ岳、五竜岳などなど、いずれも三千メートルに近い山が、帯状に列なる様はパノラマ図を見るようで壮観だった。

富山からは黒部湖に至るアルペンルートをたどり、さらに、長野側から黒部湖に入る逆のルートを利用し、仲条は大町市内に入った。

ゴールデンウィーク時ほどの込みようではなかったが、仲条は観光客たちと同じルートをたどったことになる。

途中、仲条が見た風景は、夏に向けてのひととき、ものみな萌（も）えて、いのちの新鮮さが息づいていた。

およそ、殺人事件の血なまぐさい匂いなど、どこを探してもなかった。

上市署赤根刑事が調べてくれた大町市内を出外れた霊松寺山麓の地にと、仲条はタクシーを走らせた。記者らしく、早速、タクシーの運転手に彼は話を持ち掛けた。行先の真光命教についての土地の評判を訊くためだった。

「取材で行くんだけど、あそこは子授けのほうは霊験あらたかだったんだってね。それでやはり、女の信者が多いんですか？」

真光命教のことについては、赤根刑事から多少の資料は得ていた。

子授けだけでなく、一種のおさすり治

療で、肩凝りや頭痛持ちの慢性病を治したり、また、占術も行い人生相談にも応じるといった広範囲のことを、女教祖、野々村芳子こと真如尼（しんによ）はこなしているふうだった。

富士山に詣でる富士講や、それに立山詣でなどなど、講や詣でなどの名のつくものには、精進落としと称し、大らかな性の解放の時間が、大抵は用意されていたと伝えられる。

そんな話を知っていたので、仲条は子授けの生殖の行為と、立山信仰も何か関係があるのかと考えたりしていた。

「時たまそういう女の人がいるみたいだね。ほんとうに信じている連中は、次に亭主と二人でやって来て、二、三日は神さまの治療を受けていくみたいだよ。子を授かるったってさ。アレやんなくちゃできねえもんな。夫婦で泊まり込んで、せつせと励む、それで効目があるんじゃないかねかと、地元の連中は言ってるがね」  
中年の運転手は興味本位の口調で答えた。

「なああるほどねえ」

仲条も、運転手に合わせ、ふざけたふうの口をきいた。

「亭主がダメな場合はどうするんだろうかなって話があってね。女に種づけする男をあの女教祖サマ、飼ってんじゃないかって噂が出たこともありますよ」

「そこまでいくと、話はできすぎですけど、ない話じゃありませんよね」

運転手が応じ、低く笑ったので、仲条も合わせて笑いの声を立てた。

狭い山の坂道を分けて入ると、麓の地に大きな構えの二階建ての家があった。

「ここですよ」と、運転手が言い、車を止めたので、彼は降りた。

車がバツクする音を聞いてから、ゆっくりと仲条は歩き始めた。

農業用水らしい小川が流れていて、長さ一メートルとない小さな石橋が架かっていた。運転手が言ったように、宿泊施設はあるらしく、横に長い建物は二階部分分が五、六室に分けられた構造になっている。玄関のすぐ横手に一本の大きな杉の樹が立っていた。樹の根元に×縄が張りめぐらされ、御弊（ごへい）が風に弄ばれてちらちらと動いていた。

宗教臭があるのは、この杉の樹の（結果）を示す×縄飾りだけだった。

仲条は真如尼を訪れることに予約を取っていたわけではない。

石橋を渡り、垣根のない庭内に入った。あたりは静かで、裏山の樹々の梢が、風にこすられる音だけがざわざわと鳴っている。

仲条は自分の革靴の音を聞いていただけだった。午後三時はもう過ぎていた。

頭の上にあった太陽が雲間に入ったようだった。足元から光が失われて行き、仲条自身の体も影に包まれた。

仲条はためらいの気持ちも持った。

（野々村芳子の過去の匂いを嗅ぐことに

何の意味があるのか？もしかしたら、誰も語りたくない過去を、おれは白日の下にさらけ出そうとしているのかも知れない）

そのくせ、その考えの下から、自分の嗅覚が嗅ぎ分けているものが、案外いい線いっているかも知れないなども考えている。

赤根刑事の調べでは、比呂あすかこと、野々村久美は、満一歳にもならない頃に、母親の手を離れ、富山県中新川郡舟橋村の実家の祖母のところに移けられ、その祖母が病死したあと、富山市内の特別養護施設に移けられ、中学卒業時まで孤児同様の生活を送った。

そのあと、久美は地元出身の代議士、犬伏美千雄の世話になり、高校生活を東京で送り、卒業半ばで、歌手になるため芸能プロダクションに入った。上京した久美が、その後日常生活で誰に世話になったかはいまのところわかっていない。

仲条は引戸になっている玄関の扉を開け、来意を告げた。しばらく返事がない。上り框（がまち）はよく磨かれた板の間で、その先は襖戸（ふすまど）左手に長い廊下が続いているようだった。

仲条はもう一度「ごめん下さい」と大きな声を上げた。

やっと人の気配がし、廊下をひたひたと歩いて来る者の足音がした。

小柄の老人が横手の廊下のほうから顔を出し、中途半端にお辞儀を返す。

「あの、日報新聞の仲条と言いますが、真如尼先生にお目に掛かりたく伺いました」

「予約はとっておられますか？」

老人は不快げな顔になった。

予約をとっていない者は受け付けられないという断りの意味が語意には込められていた。老人は眼がぎよろりとしており、小さな顔の割にいやに耳が大きかった。

齡の頃はもう七十をいくつか過ぎていくようだった。

「日報新聞で今度、立山信仰について、特集記事を組むことになりました、それで教祖様は、富山のご出身で、民間信仰にも知識のある方だとお聞きしたものですから」

仲条はていねいに口をきいた。

民間信仰？については口から出まかせのことだった。が……

「ちよつとお待ち下さい。先客があります、先生に伺ってまいります。お名刺を」

頭のとっぺんから爪先まで、老人は遠慮なく仲条を観察してから、右手を出した。

（若い記者だから、どうせ愚にもつかぬことを訊くのだろう）

老人は小馬鹿にしたふうの態度で、仲条に接した。控えの間に仲条は通された。一段高い正面は御簾台（みすだい）になつていたが、そこには人の姿はなかった。御簾台の後ろの壁面には曼陀羅図絵

(まんだらず) のようなものが掛けられていたが、すだれが邪魔になり、仲条には絵柄のほうはよくは見通せなかった。

七、八分、仲条は待たされた。

「何のご用でしょうか？」

十畳間の端のほうに坐っていた仲条は、正面の御簾台ばかり見ていたので、背後から声を掛けられたとき、驚いて振り返った。巫女(みこ)姿を想像していたが、彼がみとめたのは四十半ばの洋装の女だった。

(野々村久美の母親?)

そんな思いで女の顔を見たせいもあるが、比呂あすかの派手な顔つきと似通ったところがあり、わざわざ、ほんとうの名をたずねずとも、芳子と久美は母と娘の関係だと、仲条にはすぐに知れた。

真如尼は老人のすすめに紫色の座布団に正座して坐り、仲条と対した。

「先程用向きは申し上げましたが、教祖様は富山の出だとお聞きしたもので、何か立山信仰とか、または、富山の地に伝わる民間信仰についてご存知のことがあれば、お教え頂きたいと思ひます。それにご神体についても、差し支えなければ」

「特に申し上げることはありません。わたしどもはすべて秘儀を旨としていますから」

「秘儀ですか？秘儀と申しますと？」

「秘儀と申し上げた以上のお答えは致しかねます」

長い髪を後ろで一つに束ねているのだが、真如尼を神に仕えている者に見せた。麻地の水浅葱（みずあさぎ）色の袖長のワンピースを着た女は、きちんと膝を揃えて坐っており、背も真直ぐに伸ばしていた。元中居で、愛人の子供を生んだ女、それに自分の子を人手に委ねたまま長年暮らして来た女―仲条の野々村芳子に対する先入観念はあまりいいものではない。

だが、美貌な上に、そういっただらしのなさのイメージはなく、喋り方もきちんとしたものだだったので、仲条は相手に半ば吞まれていた。

「あの…子授けの靈験あらたかと伺っておりますが、そのへんの話をお聞かせ頂けませんか？」

「さあ、そのように私共は吹聴しているわけでもないのです、新聞で特に採り上げていただくのはどうかと思います。さつきも申し上げたように秘儀ですから、その秘儀を信じない方には何の効用もないことでしょうし」

「それはそうですが……」

仲条は話の接ぎ穂がなくなり、次に何を質問すべきか、頭をめぐらせた。

「あ、そうでした。その靈験ということですが、教祖様は子供の頃から、その、靈的感応というか、そのようなものを、神様から授かっておられたのですか？」

しどろもどろの調子の質問になった。

「子供の頃からそういう話はありませんが

、新聞で書き立てて頂くほどのことでは  
ございません。どんな霊能者もすべて、  
天の神からおのれの使命を、生まれなが  
らに授かっているものなのです」

「天の神ですか？その、ご神体に立ち入  
って申し訳ありませんが、教祖様のおっ  
しやる天の神とは何でしょうか？」

「ですから、心と心の結ばれた信者の方  
としかわが身も心も結ばれないのです」

真如尼は口元に笑みを浮かべていた。  
が、その眼は冷ややかに仲条を見返して  
いた。

「あなたは、わたしにとっては悪しき者  
です。わたしの体からはいまも青白い澄  
んだ幽体光（オーラ）が発せられていま  
すが、あなたのそれは汚濁と猜疑心に充  
ちた赤紫色（マゼンタカラー）、わたしに  
はあなたの心の中まで見えています」

「…そのような」

「いえ、再びこの場には、お出にならな  
いほうがいいでしょう。わたしは霊能力  
を持ち合わせていますから、あなたが今  
日この場にやって来るのはもう一カ月も  
前にわかっていました。正確に申し上げ  
れば、五月十一日の朝、わたしはそのよ  
うな神の啓示を受けました」

「五月十一日ですか？」

と仲条は問い返したただけだった。

すぐには五月十一日という日に関する  
記憶はらなかった。

「教祖様、お時間でございます。どうぞ  
、身仕度をお整え下さいますよう」

部屋に顔を出した老人が言い、ついでにぎよろ眼で仲条の顔を睨みつけた。

控えの間にずっといて、あの気味の悪い大きな耳で、二人の会話をたぶん盗み聞きしていたのだろう。

仲条はこの老人に早々に追い出された。帰り道はタクシーはつかまらないので歩くしかなかった。

（五月十一日の朝だと？あの女、何を理由に日付けまで口にしたのか？）

そう考えながら、山坂の道を下り始めた仲条だったが道の半ばで足を止めた。

「五月十一日の朝？比呂あすかの首なし死体が発見された日じゃないか……」

仲条は慌てて手帖を取り出し、五月十一日のページを繰った。

比呂あすか殺人事件発生！遺体発見午前七時頃とメモの文字が印されていた。

仲条はもう一度、山坂の道を駆け上がりたくなつた。

（あの女は自分の娘の死を知っている。それなのにあの平然とした態度は何なんだろう。幼少時別れた母と娘だから親子の情というものがないのか？それに身辺の匂いを嗅ぎに来た新聞記者をうさん臭げに追っ払った……）

仲条は山坂の上の方角を振り返った。低い山々だったが、視野の果てには、濃い緑の山塊が控えていた。

夕暮れどきにはまだ間があったが、曇り空だったので、すでに、山々には薄い闇の気配が忍んでいたのであった。

（第三章）  
了